

大槌町の  
漁師へ

# 三陸沖に“瀬谷丸”を

## 瀬谷の若者が被災地支援



発足式の様相

被災地に炊き出し等の援助に出向いた瀬谷区の若者が、岩手県大槌町で絆を持ち、現地での交流が始まった。やがて、瀬谷フェスティバルに参加してもらいなど、その交流はますます深くなった。

瀬谷区の若者が被災地での炊き出し等の援助に出向いたことが契機で、交流が生まれた大槌町漁協に船を贈ろうというプロジェクトが進行している。実行しようとしているのは三陸沖に瀬谷丸を、実行委員会（露本晴雄会長）。昨年12月から打ち合わせを重ねており、各方面に支援を呼びかけている。



瀬谷の園児が描いた絵が現地に

船を贈ろうと決めたきっかけは、瀬谷フェスティバル後の会食の席だったといふ。その席で、当日参加していた大槌町の漁師に「今一番困っていることは何ですか」という質問をぶつけてみたところ、返ってきた答えが「仕事をするための船が欲しい」というものだった。生活用品や金銭ではなく、仕事をするための船が必要という前向きで切実な現状には、あづまの幼稚園の園児が描いた「瀬谷丸」の絵を掲出。その後、何度か話し合いを重ね、ようやく3月5日に発足式を開催した。当日は多くの賛同者が会場を訪れ、支援の輪が広がるとしている。



炊き出しで交流を深めた